

COP10開催に先駆けた他大学・学生間の意見交換会

一ノ瀬研究室 環境情報学部4年 佐々木恵子

1. 意見交流会の趣旨



2010年9月5日から7日にかけて、全国で造園分野を専攻する学生30名程度が集い(慶應義塾大学、京都大学、札幌市立大学、東京大学、東京農業大学、長崎大学の6大学)、京都大学が研究を進める滋賀県湖西地域(琵琶湖西部)にて合同合宿を実施した。今年度、日本を議長国として生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が開催され、私たちはいち学生団体として10月末

に名古屋で催される生物多様性フェアに出展する予定であり、今回の合同合宿では顔合わせを兼ねて出展内容の議論と琵琶湖をフィールドとした情報収集を行った。

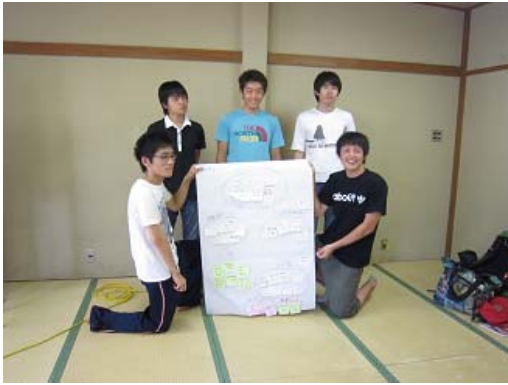
2. フィールドトリップと意見交換

初日は京都大学の学生により合宿の趣旨と翌日のフィールドトリップについての説明を受けた。地元の方に現地をご案内していただき、堰を設けたことによる水位低下や外来魚の移入により、魚介類の生産量(生態系サービス)が著しく減少したことがわかった。

合宿2日目は琵琶湖の「里域」または全体像の把握から始まり、フィールドトリップを踏まえて今後地域の環境保全活動に学生がどのように関わっていけるかについて議論した。以下がグループ内容である。

- ① 内湖班：外来魚問題と昔ながらの船漕ぎ体験(左図)
- ② 湖と川班：NPO活動によるヨシ群落の再生と魚道整備について(右図)
- ③ 里山林班：地元との景観構成要素の抽出、山林資源の利用について
- ④ 水田班：生き物とのふれあいについて





フィールドトリップ終了後、各班見学したことや感じたことなどを KJ 法を用いて整理した。SFC の学生が大きな割合を占めていたので、発表時にはなにを問題と考え、そこからどのような展開を望むのかなどの提案が多かった。現場主義の京都大学とそこからの展開を考える SFC のコラボレーションは相乗効果を生み出したのではないかと考える。

3. 生物多様性フェア出展に向けた議論

今回の合同合宿の目的は学生間ネットワークの形成だけではなく、学生団体として10月に行われる生物多様性交流フェアにてなにを社会に訴えかけていくのかを議論するためでもある。琵琶湖での活動を調査し、私たち学生が現場で起きていることを社会に伝えていくことは本合宿の成果である。しかし、ブースには専門家から外国国籍の方まで様々な人が訪れる。京都大学が準備した企画のほかに、一般の人が生物多様性問題をより身近に感じてくれるような仕掛けが必要と感じ、社会と生物多様性をつなぐためのプロジェクトを立ち上げた。SFC の学生とこのプロジェクトに賛同してくれたメンバーが募り、深夜遅くまで議論した。最終日、全体での打ち合わせにおいてまとめた企画を下記に示す。

- 1) ポスターグループ：琵琶湖をフィールドとした「現場」を伝える
⇒フィールドトリップを踏まえ、合宿の成果物をポスターとしてまとめる。
- 2) ブースデザインとオブジェ：社会と生物多様性をつなぐための工夫
⇒ブースの内装空間設計や訪れた方との共同作品を出展期間中に制作する。
- 3) 映像：学生個人の想いを社会に直接伝える
⇒成果物は全体としてひとつだが、参加した学生ひとりひとりの想いを伝えるための手段。ポスターができるまでの様子をドキュメンタリーにして発信。
- 4) 広報：事前広報活動と学生団体情報を提供する
⇒取り組みに興味を持ってもらうための情報発信。ブログの更新や小冊子の制作。
- 5) 総務：全体のとりまとめ
⇒全体の日程調整や進行状況の確認を行う。

ブース出展に向けて、お互い意見を主張し合えた有意義な合宿であった。出展時のシフトを有志により募ったところ、全員が積極的に举手した。ブースのテーマは「BI 和 CO-琵琶湖 2100-」、それぞれ Biodiversity、共存、Cooperation の意味がある。合宿は出だしにすぎないが、ブース出展に向けて走り続けていきたい。

